

「敬神愛人」と「幽玄啓明」：名古屋学院大学の二つの基本的精神

著者	?見 伊三男
雑誌名	名古屋学院大学論集 人文・自然科学篇
巻	55
号	2
ページ	55-89
発行年	2019-01-31
URL	http://doi.org/10.15012/00001138

〔論文〕

「敬神愛人」と「幽玄啓明」

——名古屋学院大学の二つの基本的精神——

高 見 伊三男

名古屋学院大学スポーツ健康学部

要 旨

I FC.クラインとイエスにおける「敬神愛人」においては、1. FC.クラインにおける「敬神愛人」、2. イエスにおける「敬神愛人」について考察した。結論的には、クラインにおける「敬神愛人」（標語）は、(1) 発見されたクラインの説教（その3年前）においてその萌芽が豊かに含まれ、さらに信仰的にはイエスにおける「敬神愛人」に基づく。II 福田敬太郎とイエスにおける「幽玄啓明」においては、1. 福田敬太郎における「幽玄啓明」、2. イエスにおける「幽玄啓明」について考察した。結論として、大学と教会は、幽玄（真理）の探究の啓明（啓示）において結ばれる。特にイエスまた教会は、全人格の根本なる真理がそれ自体を示していることを求める。III まとめにおいては、「敬神愛人」と「幽玄啓明」は、究極的には主イエス・キリストに基づき、宗教的に、実践的に、本学の基本的精神として、相補的であることを確認した。

キーワード：敬神愛人，幽玄啓明，名古屋学院大学，二つの基本的精神，相補的

“Keisin aizin” and “Yugen keimei”

——The two basic spirits of Nagoya Gakuin University——

Isao TAKAMI

Faculty of Sport and Health
Nagoya Gakuin University

目 次

I FC. クラインとイエスにおける「敬神愛人」

1. FC. クラインにおける「敬神愛人」

- (1) 発見されたクラインの説教
- (2) クラインの説教における愛の特徴
 - ①人間について
 - ②神の愛から愛は生まれる
 - ③父なる神の愛の成就としての御子イエス・キリスト
 - ④御子・父なる神への愛
 - ⑤兄弟愛
 - ⑥すべての人々への愛
 - ⑦日本への愛
- (3) クラインにおける「敬神愛人」
 - ①「発見されたクラインの説教」は、「クラインの敬神愛人（標語）」をすでに萌芽として含んでいる。
 - ②「クラインの敬神愛人（標語）」は、「発見されたクラインの説教」を前提として参考にすることが重要である。
 - ③「発見されたクラインの説教」における愛の特質について

2. イエスにおける「敬神愛人」

- (1) 聖書におけるイエスの「敬神愛人」
- (2) イエスにおける愛の特徴
 - ①律法学者の質問
 - ②神なる主の愛の掟
 - ③神の御子イエス・キリストによる愛の成就
 - ④御子への愛
 - ⑤父なる神への愛
 - ⑥さまざまな隣人への愛
- (3) イエスにおける「敬神愛人」
 - ①イエスの「敬神愛人」の特徴
 - ②イエスにおける愛の特質について
 - ③「クラインの敬神愛人（標語）」と「発見されたクラインの説教」と「イエスの敬神愛人」

II 福田敬太郎とイエスにおける「幽玄啓明」

1. 福田敬太郎における「幽玄啓明」

- (1) 第二の建学の精神
- (2) 福田敬太郎における信仰の特徴
 - ①人間について
 - ②「幽玄啓明」とは
 - ③信仰について
 - ④「求めよ、さらば与えられん」
 - ⑤二つの建学の精神
 - ⑥名古屋学院大学のビジョン

(3) 福田敬太郎における「幽玄啓明」

- ①福田敬太郎における信仰
- ②福田敬太郎における「幽玄啓明」
- ③福田敬太郎における「求めよ」

2. イエスにおける「幽玄啓明」

「敬神愛人」と「幽玄啓明」

- (1) 聖書におけるイエスの「幽玄啓明」
- (2) イエスにおける信仰の特徴
 - ①あなたがたは悪い者
 - ②天の父
 - ③御子
 - ④信仰
 - ⑤求めなさい
 - ⑥黄金律
- (3) イエスにおける「幽玄啓明」
 - ①イエスにおける信仰の特徴
 - ②イエスにおける祈り求め
 - ③福田敬太郎とイエスにおける「幽玄啓明」

Ⅲ まとめ

- 1. クラインの「敬神愛人」と福田敬太郎の「幽玄啓明」は、究極的には主イエス・キリストに基づく。
- 2. 「敬神愛人」と「幽玄啓明」は、宗教的に、相補的である。
- 3. 「敬神愛人」と「幽玄啓明」は、実践的に、相補的である。
- 4. 「敬神愛人」と「幽玄啓明」は、本学の基本的精神として、相補的である。
- 5. 「敬神愛人」と「幽玄啓明」についての研究が、今後ますます重要である。

Ⅰ F.C.クラインとイエスにおける「敬神愛人」

1. F.C.クラインにおける「敬神愛人」

(1) 発見されたクラインの説教

「敬神愛人」は、本名古屋学院大学における建学の精神である。すなわち、本学における教育・研究などすべての働きの人格的基礎であり、また人格的目的でもある¹⁾。1973年（昭48年）4月、学校法人名古屋学院大学が設立され、学校法人名古屋学院中学校・高等学校と法人分離することになった時に、本大学は名古屋学院の建学の精神を大切な標語として継承した。さらに、その建学の精神は、私立名古屋中学校に遡り、そして1887年（明治20年）、米国メソジスト・プロテスタント教会宣教師フレデリック・C・クライン博士（D.D.Frederick Charles Klein）が創立した名古屋英和学校にまで遡ることになる。

しかし、F.C.クラインが「敬神愛人」をその名古屋英和学校の建学の精神として掲げた彼の説教や解釈については、現在のところ本学の周辺には見当たらない。クラインが関わった多くの資料、例えば、本人が書いた報告書や会報や書簡などは、現在アメリカの教会関係の図書館や資料館に保管されている²⁾。それらの多くの眠っている資料について調査・蒐集・研究するために、4年前に「クライン研究会」を立ち上げた。これからの研究会の諸成果が期待されるところである。

ところで、その「クライン研究会」を立ち上げてまもなく、まず日本国内におけるクラインの資料を調査・蒐集するために、筆者たちは東京の青山学院資料センターや横浜本牧教会（クライン設立）や横浜英和女学院中学・高校（クライン元校長）を訪問した。その時、横浜開港資料館にも足を伸ばしてみた。彼の渡航記録を見つける目当てであったのだが、当時の英字週刊誌 *The Japan Weekly Mail*

にそれは見いだせなかったが、後日その英字新聞にクライン自身の説教が掲載されていることが見い出されたのである。クラインのその説教は、1884年1月6日（日）から13日（日）まで築地と横浜の両ユニオンチャーチで開催された「初週祈祷会」において、特に13日（日）の最後の説教として行われたものである。当時の日本は、特にリヴァイバル（信仰覚醒）が盛り上がりつつあったのだが、その新年の「初週祈祷会」はその一環として行われた³⁾。クラインがその説教を行ったのは、横浜に着いてから4か月目のことであった。それから3年後には、横浜から名古屋に移り、名古屋英和学校を設立し、その建学の精神として「敬神愛人」を掲げて行くことになったのである。

クラインのその説教の全文は、*The Japan Weekly Mail*（1884・1・19）に掲載された。その全文と共同邦訳が『2018年度名古屋学院大学論集 人文・自然科学篇55巻2号 葛井先生退職記念号』の本論集に掲載されているので、詳しくはそちらを参照していただきたい。それに目を通しただけでもわかるように、そのクラインの説教は聖書、特に使徒パウロにおける愛についての豊かな説教となっている。そこには、クラインが3年後には名古屋英和学校に「敬神愛人」を掲げ、10年間にわたり日本における横浜（4年間）や名古屋（6年間）でキリスト教会やミッションスクールを設立していくことになったその志向が、明確に、豊かに述べられているのである。

（2）クラインの説教における愛の特徴

新たに発見されたクラインの説教は、最初の太字における聖書の一段（以下の③の引用文）に導かれて、すなわち、使徒パウロによるテサロニケの信徒への手紙一3章12-13節における愛の言葉に導かれて、パウロの愛についての豊かな解釈を展開している。そうしたクラインの解釈において注目される愛の特徴を以下に取り上げておきたい。

①人間について

パウロもクラインも、良き愛は人間から生まれるとは言っていない。パウロは、「既に指摘したように、ユダヤ人もギリシア人も皆、罪の下にあるのです⁴⁾」（ローマ3：9）と、このことをその書簡のあちらこちらで強調している。

また、クラインは、

“when we stand with earth’s unfortunates amid scenes of degradation, where the spray from the rushing current of iniquity falls at our feet, and our hearts sicken at the sight of lawless transgressions, our thoughts turn to the seared innocence of Paradise as the starting point, and the absence of love as the cause which reddened the earth with a brother’s blood, and has sent wild, ceaseless pulsations of enmity coursing through the forms of men.”（「わたしたちが退廃の場面のただ中で地球の不幸な人々と共に立つときに、不正の激しい流れからのしぶきがわたしたちの足元に落ち、そしてわたしたちの心が無法な違反を見て吐き気がするところでは、わたしたちの思いはスタート地点としての楽園の無感覚になった無邪気へと、そして兄弟の血で地上を赤くし、人々の振る舞いによって走る憎悪の荒ぶる絶え間ない振動を送ってきた原因とし

ての愛の欠乏へと向かいます⁵⁾。))

と述べている。これは、聖書の最初の創世記にある、エデンの楽園における人類の墮罪とそれ以来の楽園からの追放の状況を意味していると考えられる。特に時代的には、アメリカでの奴隷制度をめぐる南北戦争(1861)や世界的な植民地化(インドの英領化(1858)など)また戦争が頻発した背景があった。

②神の愛から愛は生まれる

上述①のように墮罪してしまった人間に、良き愛はどうして生まれるのであろうか。クラインは、パウロの次の言葉を、主に彼のローマの信徒への手紙5：5-8から引用している。

“The source of Love is in God, ‘for love is of God,’ and the apostle says ‘the love of God is shed abroad in our hearts by the Holy Ghost.’” (「愛の源は神の中にあります。『なぜなら愛は神からであります。』そして使徒は『神の愛は聖霊によってわたしたちの心に広く注がれています』と言っています。))

ここでクラインは、“The source of Love is in God, ‘for love is of God,’” (「愛の源は神の中にあります。『なぜなら愛は神からであります。』)と明言している。しかも“‘the love of God is shed abroad in our hearts by the Holy Ghost.’” (『神の愛は聖霊によってわたしたちの心に広く注がれています。』)と引用している。これは、神の愛がそのように特にキリスト者のわたしたちに現在も注がれているということを意味している。神は、「天地の主」(使徒言行録17：24他)、すなわち、天地万物の偉大なる主なる神ではあるのだが、しかし、これだけでは偉大すぎて具体性に多少欠けているように思われるかもしれない。

③父なる神の愛の成就としての御子イエス・キリスト

そうした具体性に多少欠けた神の愛は、どのようにして明示すなわち啓示されたのであろうか。パウロは、標題の言葉の中で、

“And the Lord make you to increase and abound in love one toward another, and toward all men, even as we do toward you: To the end he may stablish your hearts unblameable in holiness before God, even our Father, at the coming of our Lord Jesus Christ with all his saints.” (「そして主がお互いの愛とそしてすべての人々への愛において増し加えることをあなたがたにさせていただきますように。まさにわたしたちがあなたがたにするように。終わりまでに彼が彼のすべての聖なる者たちと一緒にわたしたちの主イエス・キリストの来臨の時に、まさにわたしたちの父なる神の御前にあなたがたの心を聖さにおいて非のない者として立ててくださいますように⁶⁾。))

と祈りを捧げている。ここで、“the Lord”（「主が」）という言葉が注目される。これは、その後に述べているように、“our Lord Jesus Christ”（「わたしたちの主イエス・キリスト」）を指している。すなわち、主（救い主）であるイエス・キリストがあなたがたとわたしたちのキリスト者を愛において増し加えてくださるように、また、主イエス・キリストが彼の最後の来臨の時に、まさにわたしたちの父なる神の御前にあなたがたの心を聖さにおいて非のない者として立ててくださいますようにと、ここでは主イエス・キリストに向かってパウロは祈っているのである。

クラインは、その主イエス・キリストについて、まず

“Human conception can form no realization of a grander work than this, the restoration of fallen humanity, and the reestablishment of its love, elevating and unfolding, as it does, human nature into the image of God ; and this sublime work well merited the direct interposition of God in the great act of substitution, whereby the plan of redemption was fully and forever consummated.”

（「人間の考えはこのこと、すなわち、墮落した人間性の回復やそして人間の性質を神の似姿へと実際に高め開くところのその愛の再建、よりもより偉大な働きを何ら実現へと形作ることはできません。そしてこの崇高な働きは、代理の偉大な行動における神の直接的な仲裁—それによって贖いの計画が十分にそして永遠に成就された—によく相当しました。）」

と説明している。ここで、その愛の再建という、偉大なる、崇高な働きは、“(this sublime work) well merited the direct interposition of God in the great act of substitution, whereby the plan of redemption was fully and forever consummated.”（「代理の偉大な行動における神の直接的な仲裁—それによって贖いの計画が十分にそして永遠に成就された—によく相当しました。」）と伝えている。この神の直接的な仲裁としての贖い（奉仕的・献身的愛）の計画が十分にそして永遠に成就されたのは、イエス・キリストの全生涯を通して、特に神の御子（③下記引用文参照）としての降誕、権威ある教え、さまざまな病などの驚きのいやし、そして十字架の全き贖いとその報いとしての復活・昇天・天の父なる神（③上掲文参照）の右の着座・（最愛の）御子また救い主（王）としての永遠の執り成しを通してであるということを意味している。

さらにクラインは、

“Because Christ is holy, and we are to be like him, and because ‘without holiness no man shall see the Lord.’ Our condition, and the time when, in that condition, we are to be presented are set forth. To my mind that is clear enough. A man’s body is imperfect. Jesus Christ was the only perfect man since the fall. when a man’s body is consigned to the grave it is still an imperfect body, but his soul, if he died in the faith of Jesus Christ, will be cleansed by the blood of Jesus, for ‘the blood of Jesus Christ his Son cleanseth us from all sin,’ and it will be fit for Heaven, and angelic associations. At the resurrection, that body will be raised a perfect, glorious body like unto Christ’s. The soul already perfect will reinhabit that glorious body, and thus will

be presented unblameable in holiness at Christ's coming.”（「キリストは神聖でありますので、わたしたちも彼のようにあるべきであります。なぜならば、『聖化なくしてだれも主を見ることはないであります。』わたしたちの状態とそしてその状態でわたしたちが示されるべき時は述べられています。わたしの心にそれは十分に明らかであります。人の体は不完全であります。イエス・キリストは墮罪以来ただ一人完全な人でありました。人の体は墓へと渡される時、それはなお不完全な体です。しかし、彼の魂は、もし彼がイエス・キリストの信仰において亡くなれば、イエスの血によって清められるでしょう。なぜなら、『御子イエス・キリストの血はすべての罪からわたしたちを清めてくださり』、そしてそれは天国とそして天使の交際に合うからであります。復活の時に、その体はキリストのような完全な、栄光の体に上げられるでしょう。すでに完全なその魂は、その栄光の体に再び住むでしょう。こうして、キリストの来臨時に聖さにおいて責めのない者として示されるでしょう。）」

という希望を抱いているのである。これは、パウロも同じ希望を抱いていたように、キリスト者は最後には父なる神の御子・救い主なるイエス・キリストを目標としているということを意味している。すなわち、最後には、その目標としてのイエス・キリストの栄光の体のようにわたしたちキリスト者も変えられることをその約束として希望しているのである⁷⁾。

④御子・父なる神への愛

上述③父なる神の愛の成就としての御子イエス・キリスト、に対して、キリスト者は、まず信仰において受容し、服従していくことになる。これは、全人格的に受動的な応答である。しかし、キリスト者はそれだけでは止まらない。さらに、そうした御子イエス・キリストさらに御子と永遠に一体なる父なる神に対して積極的に応答し、愛していくことへと向かうことになる。

パウロもクラインも、そうした愛について述べているのであるが、ここでは主にクラインの説教における言葉に注目してみたい。まず、

“What has our love to do toward having us presented unblameable in holiness? • • Because Christ is holy, and we are to be like him, and because ‘without holiness no man shall see the Lord.’”（「聖化においてわたしたちを責めのない者として示されるのに向けてわたしたちの愛は何をすべきでありますか？ • (中略) • キリストは神聖でありますので、わたしたちも彼のようにあるべきであります。なぜならば、『聖化なくしてだれも主を見ることはないであります。』」)

と述べているように、まず“our love”（「わたしたちの愛は」）は、神聖なる、すなわち、神の御子なる（“we are）to be like him,”（「キリストのようにあるべきであります。」）こうしたキリストへの積極的な愛は、具体的には、その教会やチャペルでの共同礼拝や祈りや賛美また宣教などに現れてくることになる。それらの前壁また高所にはキリストのしるしとしての十字架が必ず掲げられているのである。

また、クラインはその愛と関連して、

“There can be no doubt that love is a creation, for both doctrine and experience teach that he whom God loves, in him he creates love on the principles of cause and effect; for when the man fully realizes that God does love him he loves God in return; and the slightest drawing to him, I may remark, is the result of His Spirit, and should be encouraged by us.”（「愛が創造であることは疑うことができません。なぜなら、教義と経験が教えることは、神が愛する彼は、彼において彼は原因と結果の原則によって愛を創造します。なぜなら人は神が彼を愛していることを十分に悟る時に、彼は返礼として神を愛します。そして、その最もわずかな彼への引き寄せも、わたしは述べたいが、神の聖霊の結果であり、そしてわたしたちによって奨励されるべきであります。」）

と言及している。“when the man fully realizes that God does love him he loves God in return;”（「人は神が彼を愛していることを十分に悟る時に、彼は返礼として神を愛します」）は、詳しく言えば、その両者の“the direct interposition”（「直接的な仲裁」）（③を参照）としての御子・救い主なるイエス・キリストを通して、キリスト者はその御子の父なる神を返礼として愛し、仕えるということになる。

さらに、クラインは“the slightest drawing to him, I may remark, is the result of His Spirit, and should be encouraged by us.”（「その最もわずかな彼への引き寄せも、わたしは述べたいが、神の聖霊の結果であり、そしてわたしたちによって奨励されるべきであります」）と述べているように、ここでは結局、御子・父なる神さらには聖霊（神の力）への愛といった、三位一体の神への愛をも含んでいると考えられる。

⑤兄弟愛

この兄弟愛は、信仰における兄弟愛である。やはり、パウロもクラインもこのことについては繰り返し述べているのであるが、ここでは主にクラインの説教から見ていく。

“With such love as is urged upon us by the Gospel the Christian rises far above the ravings of prejudice, the ambitions of limited self, and the clanishness of church or party, but, loving God most of all, he loves Christians because they are God’s children.”（「福音によってわたしたちに促されているそのような愛と共に、キリスト者は偏見のたわ言、限られた自己の野望、そして教会また教派の派閥を遠く越えます。しかし、最も神を愛して、彼はキリスト者たちを愛します、なぜならば彼らは神の子供たちであるからです。」）

クラインは、キリスト者が“loving God most of all, he loves Christians because they are God’s children.”（「最も神を愛して、彼はキリスト者たちを愛します、なぜならば彼らは神の子供たちであるからです」）と述べているように、キリスト者は神の子供たちとしてお互いに愛し合うべきなので

ある。すなわち、天地万物の主なる父なる神とその最愛の御子・長子（ローマ8:29, ヘブライ1:6）なるイエス・キリストにおいてあるところの神の子供たちとして、キリスト者は大いなる、信仰における家族なのである。

⑥すべての人々への愛

そうした信仰における兄弟愛のみならず、キリスト者はさらにすべての人々をも愛すべきであると、パウロもクラインも熱心に勧めている。パウロが、標題の言葉において、

“And the Lord make you to increase and abound in love one toward another, and toward all men, even as we do toward you:”（『そして主がお互いの愛とそしてすべての人々への愛において増し加えることをあなたがたにさせてくださいますように。まさにわたしたちがあなたがたにするように。』）

とすべての人々への愛を祈っているように、クラインも、

“Therefore this love is a necessity in the life that seeks a steady development here in righteousness, and a full fruition of all hopes in the beyond where life will be lived in its purity, peace, and love. Why should we love all men? God is no respecter of persons, since he loves all men, how can we do otherwise than love them?”（「それゆえにこの愛は、ここでは義において堅固な発展をそしてそこでは生がその純潔、平和、愛において生きられるであろう来世でのあらゆる希望の全き実現を求める人生において必要なものであります。なぜわたしたちはすべての人々を愛すべきなのでしょう？神は人々を何ら顧みずする者ではありません。なぜなら彼はすべての人々を愛しておられるからです。いかにわたしたちは彼らを愛するのに他の方法ですることが出来ますか？」）

と、すべての人々を愛すべきであると勧めている。それは、神が“since he loves all men”（「なぜならすべての人々を愛しておられるから」）であり、義をはじめ純潔、平和、愛において全き実現を求めておられるからである。その全き実現のための全き模範また目標として、イエス・キリストが十字架からの復活を通して天の父なる神と共に御子・救い主・僕なる主としてわたしたちすべての人々を常に招き、執り成しておられるゆえに、わたしたちはすべての人々を愛すべきなのである。

⑦日本への愛

前述の⑥すべての人々への愛、に続いて、クラインはさらに、日本への愛についても述べているのは、驚きである。それも、以下のようにかなり長めに述べている。

“I honor and love all who thus feel the promptings of a pure unselfish brotherly love; and I

would rather far be an humble votary at the shrine of those who, in thought and labor, in life and in death, sought the elevation of the degraded, the broadening of fraternal relations, and the inculcating of principles which bind heart to heart the sons of men, than to stand over the mouldering dust of the greatest warriors who have ever stained the earth with the blood of their fellow men. We are here, as Christians, in these fair isles, not to seek the further degradation of the inhabitants; not, with rude iconoclastic act, to demolish their temples; not to offer them a substitution of rites and ceremonies, neither force on them the emptiness of pretentious vicegerency claims, nor bind their thought; not to turn their allegiance from the Mikado and the powers that be; but with the open Bible -- thank God for it in Japan to-day -- with its grand principles, glorious doctrines, and inspiring promises, to wage a peaceful warfare in those spheres of thought and feeling where the reason, judgment, and conscience of men are touched and acted upon for their eternal interests. We seek the elevation of the Japanese that they may become what they ought to be, and what they will be by the acceptance of the Gospel of Jesus Christ, which we believe they will do. And surely while here, far from the associations of our native lands, we need to be closely united in love as God's children, and possess true love for all who tread the soil of the Mikado's Empire.”（「わたしは、純粋な非利己的兄弟愛の促進を感じるすべてを尊び、そして愛します。そしてわたしは、彼らの仲間の人々の血でもって地上をかつて汚してきた最も偉大な戦士たちの朽ちるちりの上に立つことよりも、思考と労働において生と死において低品位の向上、兄弟関係の拡大、そして率直に人々の子たちを結ぶ原理の刻印を求めた人々の神社において謙遜な神官でむしろはるかにありたいのです。わたしたちは、これらの素晴らしい島々においてキリスト者たちとしてここにいます。その住民のさらなる低品位を求めてはいませんし、彼らの寺院を破壊する粗暴な偶像破壊主義的行為をもってではなく、礼拝や儀式の代理を彼らに示すのでもなく、気取った代官的要求の空虚さを彼らに強いるのでもなく、彼らの思想を縛るのでもなく、現在するミカドと権力から彼らの忠誠心を背けるものではありません。しかし、翻訳された聖書—今日日本においてそのために神に感謝しますが—と共に、その素晴らしい原理、輝かしい教義そして聖霊の吹き込む約束と共に、そこで人々の理性、判断、そして良識が彼らの永遠なる利益のために触れられ働かれるところの思想や感情のそれらの領域において平和な戦いを遂行するためであります。わたしたちは彼らがあるべきものになる日本人の向上、そして彼らがするであろうと信じるところのイエス・キリストの福音の受け入れによって彼らがあるであろうものを求めます。そして確かに一方ここでは、わたしたちのネイティブな土地の交際からは遠く、わたしたちは神の子供たちとして愛において密接に結び付き、そしてミカドの帝国の土地を踏むすべてへの真実の愛を所有することが必要であります。」)

このところは、パウロにはないクラインならではの、日本への愛について披露されているので、わたしたち日本人には特に興味深いメッセージである⁸⁾。まず、“I honor and love all who thus feel

the promptings of a pure unselfish brotherly love; and I would rather far be (an humble votary at the shrine of) those who, in thought and labor, in life and in death, sought the elevation of the degraded, the broadening of fraternal relations, and the inculcating of principles which bind heart to heart the sons of men, than to stand over the mouldering dust of the greatest warriors who have ever stained the earth with the blood of their fellow men.”（「わたしは、純粋な非利己的兄弟愛の促進を感じるすべてを尊び、そして愛します。そしてわたしは、彼らの仲間の人々の血でもって地上をかつて汚してきた最も偉大な戦士たちの朽ちるちりの上に立つことよりも、思考と労働において生と死において低品位の向上、兄弟関係の拡大、そして率直に人々の子たちを結ぶ原理の刻印を求めた人々（の神社において謙遜な神官）でむしろはるかにありたいのです）」と、日本人一般についての好意的な評価をしている。日本人は、特に “those who ... sought the elevation of the degraded, the broadening of fraternal relations, and the inculcating of principles which bind heart to heart the sons of men”（「低品位の向上、兄弟関係の拡大、そして率直に人々の子たちを結ぶ原理の刻印を求めた人々」）としてクラインによってそれなりに評価されている。そしてそれらの日本人を結び付けている、宗教（神社や寺院など）や政治（ミカドと権力）についても、日本人と関連づけてそれなりの評価を与えていると考えられる。

他方において、クラインはキリスト者として、“with the open Bible -- thank God for it in Japan today -- with its grand principles, glorious doctrines, and inspiring promises, to wage a peaceful warfare in those spheres of thought and feeling where the reason, judgment, and conscience of men are touched and acted upon for their eternal interests. We seek the elevation of the Japanese that they may become what they ought to be, and what they will be by the acceptance of the Gospel of Jesus Christ, which we believe they will do.”（「しかし、翻訳された聖書—今日日本においてそのために神に感謝しますが—と共に、その素晴らしい原理、輝かしい教義そして聖霊の吹き込む約束と共に、そこで人々の理性、判断、そして良識が彼らの永遠なる利益のために触れられ働かれるところの思想や感情のそれらの領域において平和な戦いを遂行するためであります。わたしたちは彼らがあるべきものになる日本人の向上、そして彼らがするであろうと信じるところのイエス・キリストの福音の受け入れによって彼らがあるであろうものを求めます」）とも述べている。この中で、最後に “We seek the elevation of the Japanese that they may become what they ought to be, and what they will be by the acceptance of the Gospel of Jesus Christ, which we believe they will do.”（「わたしたちは彼らがあるべきものになる日本人の向上、そして彼らがするであろうと信じるところのイエス・キリストの福音の受け入れによって彼らがあるであろうものを求めます」）と願っているのは、わたしたち日本人キリスト者にとってもまさしく同感するところの日本人キリスト者の使命であると思われるのである⁹⁾。

(3) クラインにおける「敬神愛人」

すでに I 1(1) 発見されたクラインの説教、において触れたように、現在のところクラインによる「敬神愛人」の説教や解説は見つかっていない。それがどこかに眠っているのか、あるいは、そもそもな

いのかも、わからない。しかし、クラインが名古屋英和学校で掲げた「敬神愛人」より3年前に述べられたクラインの説教が最近新たに発見されたことにより、この「発見されたクラインの説教」とその「クラインの敬神愛人（標語）」との関係がおおよそ見通せるように思われる。その両者の関係についての注目点を以下に挙げてみる。

①「発見されたクラインの説教」は、「クラインの敬神愛人（標語）」をすでに萌芽として含んでいる。

「発見されたクラインの説教」における愛の特徴については、(2)クラインの説教における愛の特徴、において摘要してきたとおりである。すなわち、クラインの説教は、①人間について②神の愛から愛は生まれる③父なる神の愛の成就としての御子イエス・キリスト④御子・父なる神への愛⑤兄弟愛⑥すべての人々への愛⑦日本への愛、といったさまざまな愛の特徴などを豊かに含んでいることが判明した。そうしたクラインの説教が行われたのは、日本でのリヴァイバル（信仰覚醒）が盛り上がった時期であったということであるが、クラインは愛によるリヴァイバルを目指していたようにも思われるのである。

他方、いまだ見つかっていない「クラインの敬神愛人（説教等）」は、少なくとも狭義的に考えれば、上記の「発見されたクラインの説教」の中の、④御子・父なる神への愛⑤兄弟愛⑥すべての人々への愛といった愛の特徴を含んでいると考えられる。

それゆえに、「発見されたクラインの説教」は、「クラインの敬神愛人（標語）」をすでに萌芽として含んでいると考えられるのである。

②「クラインの敬神愛人（標語）」は、「発見されたクラインの説教」を前提として参考にすることが重要である。

上記①のように、「クラインの敬神愛人（説教等）」は、まだ見つかっていない。いや、仮に見つかったとしても、それは前記のような狭義的な内容である可能性がある。いずれにしても、「クラインの敬神愛人（標語）」について考察するに際しては、上記のような、愛の豊かな特徴を含んだ「発見されたクラインの説教」を前提として参考にすることが重要であろう。それらの愛の豊かな特徴は、基本的な、密接な、関連を有しているからである。本稿は、このための一考ということにもなる。

③「発見されたクラインの説教」における愛の特質について

上述の（1）発見されたクラインの説教（2）クラインの説教における愛の特徴から、クラインさらには使徒パウロやイエス・キリストにおける愛の特質についてまとめておきたい。（2）クラインの説教における愛の特徴の中の、特に②神の愛から愛は生まれる③父なる神の愛の成就としての御子イエス・キリスト④御子・父なる神への愛⑤兄弟愛⑥すべての人々への愛⑦日本への愛、から言えることは、それらのさまざまな愛は、密接な関連があると同時に共通な同じ性質があると考えられる。それらの愛は、クラインの言葉では「非利己的（兄弟）愛」（(2) ⑦の引用文中）、聖書の言葉で言えば、「アガペー（ἀγαπᾶν）の愛¹⁰⁾」として要約される。これは、他者中心的・他者奉仕的・他者贈与的な愛と言われている。こうした特質を有する愛は、前述のように、わたしたち人間からは生ま

れない愛である。わたしたち人間から生まれるのは、自己中心的・自己所有的な愛であり、「エロース(ἔρως)の愛¹¹⁾」として知られている。この「エロースの愛」から「アガペーの愛」へと導かれるためには、上記のような愛の特徴、特にその②神の愛から愛は生まれる③父なる神の愛の成就としての御子イエス・キリストが重要な愛であることは、すでに論じたところである。

2. イエスにおける「敬神愛人」

(1) 聖書におけるイエスの「敬神愛人」

イエスによる「敬神愛人」の教えは、聖書における次の三箇所に基づいている。すなわちマタイによる福音書22:34-40、マルコによる福音書12:28-34、ルカによる福音書10:25-28である。これらの三箇所には、共通点もあるが微妙な相違点もある。今回は、マルコによる福音書12:28-34を通して見ていくことにする。マルコによる福音書は、それらの中で最も先に記され、最も古い(A.D.65-70)ものと言われている。イエスの肉声に他よりも少しは近いのかもしれない。まずは、その個所を引用する。

もっとじゅうよう おきて 「最も重要な掟」

かれ ぎろん き ひとり りっぽうがくしゃ すす で りっぽ こた
彼らの議論を聞いていた一人の律法学者が進み出、イエスが立派にお答えになったのを見て、
たず ねた。『あらゆる掟のうちで、どれが第一でしょうか。』イエスはお答えになった
(ἀπεκρίθη ὁ Ἰησοῦς)。『第一の掟は、これである。「イスラエルよ、聞け、わたしたちの神である主は、
かみ しゅ ゆいいつ しゅ こころ つ せいしん つ おも つ ちから
唯一の主である。心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を
尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。」第二の掟は、これである。「隣人を自分の
ように愛しなさい。」この二つにまさる掟はほかにない。』律法学者はイエスに言った。『先生、おっ
しゃるとおりです。「神は唯一である。ほかに神はない」とおっしゃったのは、ほんとうです。そして、
こころ つ ち え つ ちから つ かみ あい
「心を尽くし、知恵を尽くし、力を尽くして神を愛し(ἀγαπᾷς θεόν)」、また隣人を自分の
ように愛する(ἀγαπᾷς ἑαυτόν)」ということは、どんな焼き尽くす献げ物やいけにえよりも
あい や ささ もの
すぐ すぐ りっぽうがくしゃ てきせつ こた み
優れています。』イエスは律法学者が適切な答えをしたのを見て、『あなたは、神の国から遠く
くない』と言われた。もはや、あえて質問する者はなかった。(マルコ12:28-34¹²⁾)

(2) イエスにおける愛の特徴

聖書における以上の一段から、イエスにおける愛の特徴についていくつかを引き出すことができるであろう。以下の6つの特徴になる¹³⁾。

①律法学者の質問

上記の聖書の一段における最初の節に、

かれ ぎろん き ひとり りっぽうがくしゃ すす で りっぽ こた み
「彼らの議論を聞いていた一人の律法学者が進み出、イエスが立派にお答えになったのを見て、
たず ねた。『あらゆる掟のうちで、どれが第一でしょうか。』」

とある。その一人の律法学者は、マタイ福音書22：34-40の平行記事によると、ユダヤ教ファリサイ派（律法主義派）の学者であった。このファリサイ派は、旧約聖書の成文をはじめその解釈の口伝をも律法として厳格に重んじていた。それゆえに、律法の数がどんどん増えて行って、しだいに煩雑になって行ったようである。彼は、思い切って『あらゆる掟のうちで、どれが第一でしょうか』と尋ねた。そうした難問を彼はイエスに試してみたのである。そうした煩雑さや難問は、その一人の律法学者やユダヤ教ファリサイ派のみならず、現代のわたしたちとも無関係ではない。わたしたちの周囲にも似たような多くの掟や教えに溢れており、そうした煩雑さや難問に常に悩まされているのである。

②神なる主の愛の掟

それに対するイエスのお答えが注目される。

「イエスはお答えになった ($\alpha\pi\epsilon\kappa\rho\iota\theta\eta\acute{o}\iota\eta\sigma\omicron\upsilon\varsigma$)。『第一の掟は、これである。イスラエルよ、聞け、わたしたちの神である主は、唯一の主である。心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』第二の掟は、これである。『隣人を自分のように愛しなさい。』この二つにまさる掟はほかにない。』」

イエスのお答えにおける第一の掟と第二の掟は、ユダヤ教の聖典である旧約聖書からの引用として答えられている。前者の掟は、その申命記6：4-5からの引用であり、原文のヘブライ語では“שמע”（「聞け」）で始まっているので、ユダヤ人は「シェマ」と呼んでいる。彼らはこの句を礼拝のたびごとに告白し、また毎日二回口に唱えた。後者の掟は、やはり旧約聖書のレビ記19：18からの引用として答えられている。こうしたイエスのお答えにおいて注目したいのは、まず「第一の掟は、これである。『イスラエルよ、聞け、わたしたちの神である主は、唯一の主』である」において、「わたしたちの神である主は、唯一の主」という旧約聖書の聖句である。「わたしたちの神である主」、すなわち、神の民イスラエルの、また天地万物の、神である主は、「唯一の主（王）」である。そうした唯一の主は、イスラエルに対してさまざまな助けと契約と掟を与えて来られたのであるが、その中の最も重要な掟として上記のような愛の二つの掟を与えてくださったのである。そのことをイエスは確認しながら、さらにその愛の二つの掟を成就して行かれることになった。

③神の御子イエス・キリストによる愛の成就

イエスは、旧約聖書から最も重要な掟として上記のような愛の二つの掟を要約された。それらの愛 ($\alpha\gamma\acute{\alpha}\pi\eta$) は、神と隣人への積極的奉仕の愛という意味が含まれている。さらにイエスは、「神の（御）子 ($\iota\acute{o}\varsigma\ \theta\epsilon\omicron\upsilon$)」（マルコ1：1）として、それらの愛の二つの掟を成就・徹底・貫徹して行かれたのである。イエスは四つの福音書にも記されているように、神の御子として降誕し、成長し、成人になられた。イエスは神なる主を「父」「アッパ (ܐܬܬܐܝܬܐ)」（口語のアラム語でお父ちゃん・お父さんの意）でしばしば祈られた¹⁴⁾。イスラエルのみならず天地万物の主なる偉大なる神をそのように親しい言葉でしばしば呼びかけられたのである。またその親しい関係に基づいてさまざまな隣人を

自分のように愛して行かれた。それらの隣人には同胞のイスラエル人のみならず異邦人さらには敵をも含んでいた。こうした神の御子イエスは、同胞のユダヤ人からは神への冒瀆罪また異邦人のローマ総督ピラトからは王への反逆罪で十字架の極刑にかけられたのであるが、その死から復活して何度も現れ、さらに天の父なる神の右に着座されて、永遠に愛なる神の（最愛の）御子・救い主（王）・僕なる主・模範・目標として現在もわたしたちを執り成してくださっているのである。

④御子への愛

上記に引用した聖書の段の後半には、イエスの応答としての愛の二つの掟に対する律法学者の反応が記されている。

「^{りっぼうがくしゃ}律法学者はイエスに言った。^い『^{せんせい}先生、おっしゃるとおりです。^{かみ}「^{ゆいいつ}神は唯一である。ほかに神はない」^{かみ}とおっしゃったのは、^{ほんとう}本当です。そして、^{こころ}「^つ心を尽くし、^{ちえ}知恵を尽くし、^{ちから}力を尽くして神を愛し^{あい}（^{α γ α π η σ ε ι ς}）^{りんじん}、また隣人を自分のように愛する^{あい}（^{α γ α π η σ ε ι ς}）」^いということは、^やどんな^つ焼き^さ尽く^{もの}す^{すぐ}献^いげ物やいけにえよりも優れています。』^{りっぼうがくしゃ}イエスは^{てきせつ}律法学者が適切な^{こた}答えをしたのを見て、^{かみ}『^くあなたは、^と神の^い国から遠くない』と言われた。」

その律法学者の反応は、イエスの愛の二つの掟が他のどんな掟よりも優れていることを意味している。それゆえ、「イエスは律法学者が適切な答えをしたのを見た」とあるにもかかわらず、「あなたは、神の国から遠くはない」というややあいまいな答えを言われたとある。

どうしてイエスはそのようなあいまいな答えをされたのであろうか。律法学者は、旧約聖書などにおけるさまざまな掟の間にたんに軽重の区別をつけたに過ぎないという可能性も考えられる。その場合、彼にとっては旧約聖書がやはり基本として有り続けることになる。それゆえに、イエスは「あなたは、神の国から遠くはない」というあいまいな答えをされたと思われる。それに対して、イエスの場合には神の御子として旧約聖書をさらに成就・更新して行こうとされたのである。そうした神の御子なるイエスを信じ、愛し、従うことが彼にとって百尺竿頭一步を進むことであった。

⑤父なる神への愛

イエスは、第一の掟として、

「『^きイスラエルよ、^{かみ}聞^{しゅ}け、わたしたちの神である主は、^{ゆいいつ}唯一の^{しゅ}主である。^{こころ}心を尽くし、^{せいしん}精神を尽くし、^{おも}思いを^{ちから}尽くし、^つ力を^{かみ}尽くして、^{しゅ}あなたの神である主を愛しなさい。』」

と答えられた。これは、旧約聖書の申命記6：4-5からの引用として答えられている。ただし、旧約聖書にはそのような積極的な愛の掟も含まれているのではあるが、神はその民イスラエルの主さらには父ということが強調され、制限されている。しかし、イエスに至っては、「イスラエルの父」のみならず「天の父」「天地の主である父」「アッバ (ܐܒܐ) ¹⁵⁾」(口語のアラム語：お父ちゃん・お父

さんの意)などと呼ばけられたのである。これは、イエスがそうした高き、広き、深き、親しき父のまさに最愛の御子であることを意味している。そこから、この御子イエスを通してこうした父なる神への礼拝、祈り、賛美、などへと招かれているのである。

⑥さまざまな隣人への愛

またイエスは、第二の掟として、

『隣人^{りんじん}を自分^{じぶん}のように愛^{あい}しなさい。』

と答えられた。これも、旧約聖書のレビ記19:18からの引用として答えられている。しかし、旧約聖書にはそのような積極的な愛の掟も含まれている一方で、隣人が神の民イスラエルに強調され、制限されている傾向がある。それに対して、イエスはそうした愛をさらに広げて行かれることになった。同胞のイスラエルのみならず異邦人さらには敵をも含むさまざまな隣人への愛として徹底して行かれたのである。

また「自分のように」は、上述の特に③④⑤を踏まえた上での信仰における自己愛であるが、この自己愛はそれにとどまらず上記のようなさまざまな隣人に仕え、愛することへと貫徹して行くことになったのである。

(3) イエスにおける「敬神愛人」

上述のように、聖書におけるマルコによる福音書12:28-34を通して、(2) 聖書におけるイエスの愛の特徴、について考察してきた。他の、マタイによる福音書22:34-40は、それに比べて、イエスの答えが中心になり、よりコンパクトな内容となっている。また、ルカによる福音書10:28-34は、主に隣人愛についてのイエスのたとえ話が展開されている。それらに比べて、マルコによる福音書は律法学者とイエスとの問答を通して聖書のイエスの愛の特徴をより多面的に考察することが可能である。以下、上述の考察を通して注目点を挙げておきたい。

①イエスの「敬神愛人」の特徴

前述のように、2 (2) イエスにおける愛の特徴、において、①律法学者の質問②神なる主の愛の掟③神の御子イエス・キリストによる愛の成就④御子への愛⑤父なる神への愛⑥さまざまな隣人への愛、といったいくつかの特徴を含んでいることが判明した。これらの特徴は内容的にも互いに密接に関連している。こうした密接な関連に改めて注目したいと思うのである。

他方において、イエスの「敬神愛人」ではなく、ただの「敬神愛人」について解釈したりすることも多々見られる。でも、それではイエスのことが抜け落ちてしまい、上述のような聖書のイエスによる「敬神愛人」ではなくなるおそれがある。そのような私的な「敬神愛人」ではなく、神の御子イエスを踏まえた上での、そのイエスの「敬神愛人」について覚えて行きたいと思うのである¹⁶⁾。

②イエスにおける愛の特質について

すでに、1 (3) ③「発見されたクラインの説教」における愛の特質について、において論じたところと共通点が多いのであるが、上述の①イエスの「敬神愛人」の特徴、におけるさまざまな愛の特徴は、密接な関連があると同時に共通な性質がある。すなわち、これらの愛は、原語のギリシア語で言えば、「アガペー(ἡ ἀγάπη)の愛」として要約される。このイエスによる「アガペー(ἡ ἀγάπη)の愛」は、イエスを模範・目標とするところの他者中心的・他者奉仕的・他者贈与的な愛と言われている¹⁷⁾。こうした特質を有する愛は、前記2 (2) ①のように、わたしたち人間からは生まれない愛である。わたしたち人間から生まれるのは、自己中心的・自己所有的な愛であり、「エロース(ἡ ἐρως)の愛」として知られている。この「エロースの愛」から「アガペーの愛」へと導かれるためには、上述のような愛の特徴、特にその②神なる主の愛の掟さらに③神の御子イエス・キリストによる愛の成就が重要な愛であることは、すでに論じたところである。

③「クラインの敬神愛人(標語)」と「発見されたクラインの説教」と「イエスの敬神愛人」

最後に、これらの三者、すなわち、「クラインの敬神愛人(標語)」と「発見されたクラインの説教」と「イエスの敬神愛人」の関係について整理しておきたい。

まず、「クラインの敬神愛人(標語)」は、クラインによるその説教・論文の類としては、すでに述べたように(1 (3) 他)、いまだ発見されていない。そもそもどこかに眠っているのかあるいはないのかもわからない。

しかし、最近「発見されたクラインの説教」は、名古屋英和学校が開設される3年前に披露された説教であるが、クラインの愛についての豊かな内容となっている。それは、聖書の使徒パウロの愛の言葉に触発されたところのクラインの豊かな愛のメッセージなのである。こうした「発見されたクラインの説教」が、「クラインの敬神愛人(標語)」を萌芽としてすでに含んでいると言っても過言ではないことはすでに論じた(1 (3) ①)。

さらに、「イエスの敬神愛人」は、聖書における特に福音書におけるイエスによる敬神愛人ということになる。この「イエスの敬神愛人」は、前述のように、豊かな愛の特徴を含んでいることが判明した。また先程の「発見されたクラインの説教」も、同様に、豊かな愛の特徴を含んでいることが判明した。その「発見されたクラインの説教」とこの「イエスの敬神愛人」は、愛の豊かな特徴においてほぼ重なっているということができる。

さらに、それらの三者の関係についてであるが、内容的にも信仰的にも、「クラインの敬神愛人(標語)」は、「発見されたクラインの説教」に萌芽として含まれ、さらに「イエスの敬神愛人」に基づくということが確認されたと言える。

II 福田敬太郎とイエスにおける「幽玄啓明」

1. 福田敬太郎における「幽玄啓明」

(1) 第二の建学の精神

近頃は、野球界で「二刀流」が注目されている。アメリカのメジャーリーグベースボール(MLB)

では、ロサンゼルス・エンゼルスの大谷翔平（1994-）が打者と投手の両者の活躍を目指している。そうした二刀流の活躍というのは、珍しいことであり、アメリカ球界最大の巨人の一人と評されているベーブ・ルース（Babe Ruth, 1895-1948）の再来かとも注目されている。

本名古屋学院大学も、そうした「二刀流の大学」と言えるかもしれない。なぜなら、I EC. クラインとイエスにおける「敬神愛人」、で論じてきたように、本学にはまず、「敬神愛人」という建学の精神が名古屋英和学校から名古屋中学校、名古屋学院中・高校を経て引き継がれて来た。今年がその創基131周年になる。しかし、それとは別な基本的精神も本学において重んじられて来ている。それは、「幽玄啓明」として伝えられて、54周年になる。その立派な石碑が瀬戸キャンパスの中心地に置かれているし、本学のホームページや毎年の基礎セミナー（一次年必修）のテキストにもその「幽玄啓明」について紹介され、説明されている。そうした「幽玄啓明」を本大学の第二の建学の精神として提唱したのは、本大学の初代学長・第三代理事長として重責を果たした福田敬太郎（1896-1980）である。その福田敬太郎は、すでに引き継いで来た「敬神愛人」の建学の精神の他に、どうしてあえて第二の建学の精神として「幽玄啓明」を唱えることになったのであろうか。こうした問いをめぐって、以下の論述を進めて行きたい。

ところで、I 1 (1) 発見されたクラインの説教、で述べたことだが、「クライン研究会」を4年前に立ち上げたが、その1年後にすなわち今から3年前に「福田敬太郎研究会」もまた立ち上げることにした。それは、本学の建学の精神の歴史や系譜について研究していく場合、クライン博士の掲げた「敬神愛人」のみならず、福田敬太郎博士が唱えた「幽玄啓明」にもそれぞれに重要なメッセージがあるのではないかと思われたからであった。しかも、それぞれの基本的精神が、特にイエスの教えと深く関連しているとも考えられるのである。本学のキリスト教主義大学の歴史また伝統について深く掘り下げていくのであれば、少なくとも、それらの二人の先人が唱えた基本的精神について研究しなければならないと両研究会のメンバー（両方ともほぼ同じメンバー）が確認したところであった。しかも、「福田敬太郎研究会」は、2016年9月に福田ゆかりの日本キリスト改革派神港教会を訪問した際、当教会の役員の方々や御長男から福田ゆかりの日記やノートをたくさんお借りすることになった。それは、『福田敬太郎日記・ノート（全29巻）』として仮製本化をしたが、さらにその中の『福田敬太郎日記No.30（Ⅱ/3）幽玄1965.6.1～1966.5.25』と『福田敬太郎ノート（Ⅱ/12）敬愛1964.4.15～1978.6.29』の2巻が完全製本化・デジタル化されたところである。その完全製本化・デジタル化が、上記の全29巻に及んでいけば、福田が唱えた「幽玄啓明」やその実像などについてより深く研究・考察することが可能になるものと期待しているところである。

(2) 福田敬太郎における信仰の特徴

福田敬太郎における「幽玄啓明」について研究・考察する場合、単にそのことだけに絞るとすると、すぐにその意味が分かりやすいことがあるかもしれない。しかし、その理解が狭く、浅くなったりするおそれがある。前述のように、「敬神愛人」との関係や聖書のイエスとの関係などについても考察しなければ、せっきくの研究の意味がないであろう。そうした諸関係を視野に入れながら、福田における「幽玄啓明」に込められた意味について、検討していきたい。その根底にある信仰に着目して、

福田敬太郎における信仰の特徴、についてまず検討しておきたい。

①不完全な人間

1972年3月発行の「麦粒」¹⁸⁾に掲載されている、チャペルでの福田の奨励において、彼は次のように述べている。

「私は今朝、ヨハネ黙示録の一部を読んでいただきました。(『また、小さき者にも、大いなる者にも、貧しき者にも、富める者にも、自由人にも、奴隷にも、すべての人々に、その右の手あるいは額に刻印を押させ、この刻印のない者はみな、物を買うことも売ることもできないようにした。この刻印は、その獣の名、または、その名の数字のことである。ここに、知恵が必要である。思慮ある者は、獣の数字を解くがよい。その数字とは、人間をさすものである。そして、その数字は、666である。』ヨハネ黙示録13:16-18) 大体ヨハネ黙示録という聖書の文学、黙示文学は普通の知恵では分りません。…これは私が考えたことではありませんが、そういうふうに解釈している神学者も聖書注解者もあるのでそのことをお伝えするわけではありますが、これは不完全な数字を表わしていると申します。ユダヤにおきまして7が完全数であり、6は不完全数である。6をいくら重ねてもやはり不完全数である。それは人間を表わしている。人間というものはいくら経ちましても不完全であるということを示しているんだという解釈がございます。これは私に非常にピンと参りました。なるほどと感ぜられた解釈でありまして、人間は、現在の人間は、この邪悪なる世界におります人間は、誰も彼もそのままでは一つの烙印を押されている。『おまえは人間である』『おまえは獣である』『おまえは不完全である』という烙印があります。…我々は生まれながらのままで獣である、罪を負って滅びるものである、という自覚をはっきりもつ必要があると思うのであります。我々一人一人が自分は神の烙印を押されるものであるか、あるいは666という数を押されるものであるか、その反省が第一であります。それをしなければキリスト教主義大学に属するものというわけには参りません。もちろん反省するだけで事が終わるわけではありませんが、それがスタートであります。」

そのように、いつかこの地上では多くの人々がある刻印をその右の手あるいは額に押される。その刻印は、その獣の名、または、その名の数字であり、この数字は、666である。この数字は、「おまえは人間である」「おまえは獣である」「おまえは不完全である」ということを意味している。福田は、このことについてまず一人一人が反省しなければならないと促しているが、特に人生を深く長く反省した場合、そのことを認めざるをえないのではなかろうか。

②「幽玄啓明」とは

福田は、この彼のキャッチフレーズを1966年(昭和41年)、すなわち、本大学の開学2年目頃から繰り返し述べるようになった。その発言は、1968年(昭和43年)に学校法人名古屋学院の財政破綻が明白になって1973年(昭和48年)に大学が法人分離をして学校法人名古屋学院大学になり、そし

て財政的に自立できるようになった1976年（昭和51年）あたりまで続いた¹⁹⁾。

まずは、注目されるのは、

「真理の探究を任務とする大学の立地と環境とは、その教育効果なり研究結果に大きな影響を及ぼすものであることは明らかである。昔から寺院建立のためには、地を相して適所が選ばれ、そこに修法と勤行とにふさわしい建築物が設けられ、今にいたるまで文化財としての高い価値をしめしている。現代にあっては、大学こそ、真理探究の場所として、同じ精神をもってその立地と環境とに留意しなければならない。

名古屋学院大学は、その創立の日から総合大学として将来の大発展を予期して、永住の校地を瀬戸品野台に定めていた。そこは自然と文化の接触する地点であり、幽玄がおのずから啓明するところである。…

体育施設も恵まれた環境につつまれて装備される。濃尾平野を眼下に展望することができるところに学生と教職員とが共に飲食し歓談するにふさわしいホールが設けられ、学園生活にふさわしいホールが設けられ学園生活にやわらぎとうるおいとを与えるように工夫される。前庭の池に鱒を養うことができれば、どんなにか楽しいことであろう。

大学の立地と環境とを考慮し、必要な諸施設にこれほど深い注意を払っているものがどこにあるか。…大都会のまん中にあるマンモス大学に至っては、職業訓練所としては兎も角、これが真理探究の場であるとは到底考えられない有様である²⁰⁾。」

という「名古屋学院時報」（昭和41年7月20日）の文章である。この見出しとして「幽玄啓明を理念とする瀬戸品野台学舎建設のスタート」とある。この瀬戸品野台は、「自然と文化の接触する地点であり、幽玄がおのずから啓明するところである。」そして「名古屋学院大学は、その創立の日から総合大学として将来の大発展を予期して、永住の校地を瀬戸品野台に定めていた」と、福田はそうした瀬戸キャンパスに本学の将来の夢を託していたのである。時代の変化なども考慮しなければならないが、福田が指摘する瀬戸キャンパスの素晴らしさを改めて覚えて行きたい。

この「幽玄啓明」については繰り返し多く述べられているのだが、次の発言は特に注目される。それは、「学問と宗教—大学におけるキリスト教教育の基本理念—」というテーマについてのものである。

「大学は、真理を追究する場であるといわれている。真理とは何か。真理は幽玄である。真理は、人間にかくされている奥義である。さればこそ、人間は、学問によって探求しようと努める。学問の道は、けわしい細い道である。ネオンが輝いて、何がどこにあるか、子どもにも直ぐわかるようなものではない。学者は、そのまっくらな道で、暴風雨の吹きすさんだような怖ろしさの中で、進むこともならず、退くこともできないで、ただ茫然とたたずんでしまうようなことさえある。真理の追究ということが、いかに困難なことであるかは、真剣に学問の道を歩み初めてわかることであり、一生を学問に身を捧げた者のみが知り得る体験である。大学は、そういう人々を中心として構成されている共同体である。

真理は、かくされているけれども、それみずからを啓明する。真理は、光であり、かぎりなきいのちである。くらやみの中に光があらわれ、宇宙の中にもろもろの生命が発生し、死から復活が起り、アルファにしてオメガなるものをつつむところのものである。混沌の中から秩序が創造されるのは、真理のはたらきである。真理は、人間に近づき、自由を与え、選び、審き、救うものである。このように真理がそれみずからを啓示するところに、まことの宗教がある。

大学と教会とは、真理によって結ばれているところの制度である。学問と教会とは、真理において一つである。現実の大学と教会との関係は、決して正しいものではない。学問と宗教とが相反発したり、また誤った結合をしている。われわれは、名古屋学院大学がキリスト教主義に基づく教育と研究を行なう機関たることを標榜するときに、伝統的なモットーを繰返すだけでなく、絶えず自己を改革しつつ、新しい態度で真理を追究し、そこに真理が啓示されることを待望するものである²¹⁾。」

福田によると、「幽玄啓明」は「学問」すなわち「大学」と「宗教」すなわち「教会（キリスト教主義）」とのそれぞれに関わる基本理念である。前者は、学問によって真理（幽玄）を探究（啓明）しようと努める。一方後者は、真理（幽玄）がそれみずからを啓示（啓明）する―特に神の御子において極まる―ところに、まことの宗教がある。そうした大学と教会とは、真理によって結ばれている。そうしたものとして、教会と大学は、「伝統的なモットーを繰返すだけでなく、絶えず自己を改革しつつ、新しい態度で真理を追究し、そこに真理が啓示されることを待望するものである。」ちなみに、その中の「伝統的なモットー」とは「敬神愛人」を意味していると考えられる²²⁾。

③信仰について

信仰についても、福田はさまざまな機会にさまざまな人々に述べている。というよりも、そのすべての発言の根底には、常に信仰が根付いていたということが言えるように思われる。次の発言は、本学の第十一回入学式式辞（1974・4・3）として述べられたものである。

「私が十七才の秋に、自分でキリスト教信仰を信ずるという決意をしたのであります。そしてクリスチャンとなりました。それがどういうことであるかということにつきましては、そう長く申すことはできませんけれども、聖書の中に『古き人を脱ぎ捨てて、新しき人を着なさい』という言葉がございます。…

パウロは、あなた方に、『古き人を脱ぎなさい。情欲によってしばられているところの過去の人を脱ぎなさい。』ということを申しておるのであります。…

最早、自分は生きているのではない。キリストが自分の内に生きておられるのであるというパウロの告白が、自分の告白になることができるように、それが新しい人を着るということでもあります。パウロは、この新しい人を着るという言葉が聖書の他の箇所におきましても、たびたび使っておりますが、他の所では、キリストを着るという風に書いてあります。…

しかし、人間の歩く場合におきまして、絶えず着ておらなければならないものは何であるか。

それが、パウロが新しい人を着なさいと、古い人を脱ぎ捨てて全く変えられて新しい人を着なさいと、心から新しくなって新しい人を着なさい、キリストを着なさいと、こういうすすめを彼はしておるのであります。…

その場合におきまして、共通の目標、それを持っていただくことが、私の今朝の願いであります²³⁾。」

ここで「古き人を脱ぎ捨てて、新しき人を着なさい」は、すでに上述の①不完全な人間、が前提になっている。そして「新しき人を着なさい」とは、「キリストを着なさい」ということにはかならない。さらに「キリストを着なさい」は、「キリストを共通の目標として持つ」ということである。この「キリスト」は、1 (2) ③神の御子イエス・キリストによる愛の成就、でも述べたように、神の御子として降誕し、さまざまな救いの働き、十字架からの復活によって天の父なる神の右に着座して永遠の御子・救い主・僕なる主・目標・模範として現在もわたしたちを執り成してくださっている方なのである。こうしたキリストに服（従）することが、信仰にかならない。

④「求めよ、さらば与えられん」

上述の③信仰について、に基づいて、また「求めよ、さらば与えられん」（マタイ7:7）もしばしば勧められている。

「我々は神をそう容易には掴むことができません。しかし、キリストが肉体をもって地上に現れたということによって神が啓示される。これは旧約聖書を通じまして神がこの地上に現れるということについての長い間の予言があり、それに対する待望があったのでありますが、そういうところに真理は自らを啓明するものである。ほんとうに求める人々の前に真理は現れます。教会というものは、そうした真理の現れること即ち真理の啓明をそれ自体示しております。世俗の大学は隠れたところの真理を人間の力で営々として求めている。教会は真理自体がここにあるということを示している。キリスト教主義の大学というものはその接点に立っているものと私は考えます。そこに名古屋学院大学がキリスト教主義大学であるという特色を示さなければならない²⁴⁾。」

ここは、福田が繰り返し唱えた「幽玄啓明」について述べているところでもあるが、また「求める」ことが繰り返し奨励されている。教会は、「真理の現れること即ち真理の啓明をそれ自体示しております」というのは、教会は全人格の根本なる真理が特にイエスにおいてそれ自体を示しているところである。他方世俗の大学は、「隠れたところの真理を人間の力で営々として求めている」というのは、大学は文系・理系のさまざまな真理を人間の力で営々として求めているところである。教会と大学とは、そうした違いはあるが、共にそれぞれの真理を「ほんとうに求める」ところである。こうした教会と大学が共存あるいは一体となったところが、「キリスト教主義の大学というもの」である。

⑤二つの建学の精神

さて、最初の1(1) 第二の建学の精神、で問題を提起したことに対して、そろそろ福田の発言を検討したいと思う。すでに引き継いで来た「敬神愛人」の建学の精神の他に、さらに新たな「幽玄啓明」という建学の精神を唱えることになったのは、なぜなのか。

まず、前者の「敬神愛人」についての福田の評価を確認しておきたい。

「我々は一つの目標をかかげておる。この諸君が講堂に入りまする前に、多数の人は気づいていられると思いますけれども、『敬神愛人』という言葉が額にかかげられております。神を敬い、人を愛するというこの標語が、我々の名古屋学院大学の永遠の目標である。すべての人に共通の目標としてこれを示しているのであります。したがいまして、一人びとりもまた、その同じ目標をもって進んでいただかなければならないのであります。一旦船に乗りました以上、そうして航海を続けまする以上は、一つの運命共同体であります²⁵⁾。」

ここで、福田は「神を敬い、人を愛するというこの標語が、我々の名古屋学院大学の永遠の目標である」と宣言しており、その理由として「すべての人に共通の目標としてこれを示しているのであります」と述べている。この「敬神愛人」はまさに「我々の名古屋学院大学の永遠の目標である」のみならず「すべての人に共通の目標」なのである。それは、このように永遠なる、大いなる課題なのである。

次に、「幽玄啓明」についての福田の下記の発言に注目したい。

「アメリカの一人の宣教師が名古屋で伝道を開始いたしまして、それが一粒の種になって学院ができてきた。その建学の精神を標語的に言表して、『敬神愛人』という言葉で我々に伝えられております。しかし、その『敬神愛人』という言葉で表わされておりますキリスト教精神が、ほんとうに現在我々の内に生きているかという事が問題であり反省しなければならないこととします。しかし私は、そうした言わば伝統的な言習わしになっております建学の精神というものでは満足しないで、8年前にここに名古屋学院大学が建てられた、その大学の者として大学の建学の精神とは何かを考える必要があると思います²⁶⁾。」

ここには、「幽玄啓明」が唱えられるようになった理由が、二つ示されている。一つは、「しかし、その『敬神愛人』という言葉で表わされておりますキリスト教精神が、ほんとうに現在我々の内に生きているかという事が問題であり反省しなければならないこととします」という問題また反省である。ここで福田がそのように問題また反省を表明していることは、深い重要な意味がある。というのは、I FC. クラインとイエスにおける「敬神愛人」、において論じたように、そもそも「敬神愛人」は、われわれ人間から生まれるものではない。それは、神から、特に御子イエス・キリストを通して啓示されて来た愛なのである。したがって、その導きを絶えず求めることが必要なのである。それが、「幽玄啓明」に含まれる求めを常に必要とするわけである。

もう一つの理由は、「しかし私は、そうした言わば伝統的な言習わしになっております建学の精神というものでは満足しないで、8年前にここに名古屋学院大学が建てられた、その大学の者として大学の建学の精神とは何かを考える必要があると思います」ということである。これまでの名古屋学院中・高校の建学の精神だけではなく、大学の建学の精神が必要であるということである。しかも、キリスト教主義の大学の建学の精神なのである。このことについてさらに詳しくは、以下の⑥に論じる。

⑥名古屋学院大学のビジョン

以上のように、福田は二つの建学の精神しかもキリスト教に基づくそれらを掲げて、名古屋学院大学のビジョンについてもしばしば論じている。まずは、イエスに習って、たとえをもって壮大な本学のビジョンを描き出す。

「人間の一生においても三つ子の魂百までという諺があるが、大学のような悠久の生命を持つべきinstitutionにしても、その誕生から三、四年の間に一つの魂が出来上がるのであって、それが長年月の間、その大学の精神、学風として続くものである。その意味において現在のわれわれが持っているものは極めて大切である。

教員、職員はもちろんのこと、1～3回までの学生諸君、来年入学する学生、これらの人々が共通にもたなければならない名古屋学院大学魂は何であるか²⁷⁾？」

その名古屋学院大学魂に関連して、福田は「わが大学を語る一旗幟を鮮明に、所信を勇敢に一」と題して、あの「蛍雪時代」の全国受験誌に投稿している。

「私は、名古屋学院大学というひとつの私立大学を、その創立の日から八年間、いわばその幼児期に保育者として看護って来たが、その間、いちばんたいせつだと思って心掛けていることは、常に大学の旗幟を鮮明にし、特色を発揮することである。

すでに数十年の歴史を持つ大学であれば、伝統もあり評判もあって、たんにその名称だけで評価が行なわれるけれども、新設大学はそうでない。なんのために大学が創立されるかということを、設置者自らはっきり意識し、世間にたいしてそれが表明されなければならない。

多くの大学がゆきづまって、その改革の声があがってすでに相当の時日が経過したけれども、現にどれほどの改革が行われたかを反省するときに、大山鳴動して鼠一匹の感じがしないでもない。実際、改革ということはむずかしいものである。

改革を必要とするものと同型のいまひとつの大学ができるということはまったく無意味である。最近数年間に、わが国には国公私立の大学の数は、雨後の筍のように増加した。大学という言葉が非常に広い意味で用いられ乱用されていることはまことに遺憾である。人為的に大学基準を作ってその規格に合ったものを公認するという現在のやり方では到底真の大学はできないと思う。

私は、名古屋学院大学の存在の理由を現代の無神論に挑戦し、有神論的立場に立って、すべ

ての学問を再検討することに求めている。それはあまりにも大きい課題である。

しかし、キリスト教主義を標榜する大学は、この大きい使命と責任とを感じなければならない。キリスト教主義大学の世俗化が事実であるこんにち、とくにこういう時代錯誤的に見える要望を出す必要を痛感する。

旗幟を鮮明にし、所信を勇敢に表白することが教育者として、また研究者として大切である²⁸⁾。」

福田は、まず、「私は、名古屋学院大学というひとつの私立大学を、その創立の日から八年間、いわばその幼児期に保育者として看護って来たが、その間、いちばんたいせつだと思って心掛けていることは、常に大学の旗幟を鮮明にし、特色を発揮することである」と切り出している。そして、その旗幟また特色として以下に一つのことだけを挙げている。他の本学のビジョンについても他所でいくつも挙げているのであるが、ここでは字数の制限からか、ただひとつのビジョンだけを鮮明にし、表白している。それは、「私は、名古屋学院大学の存在の理由を現代の無神論に挑戦し、有神論的立場に立って、すべての学問を再検討することに求めている。それはあまりにも大きい課題である。しかし、キリスト教主義を標榜する大学は、この大きい使命と責任とを感じなければならない。キリスト教主義大学の世俗化が事実であるこんにち、とくにこういう時代錯誤的に見える要望を出す必要を痛感する」というビジョンである。福田は、ときどき「本学の父」と呼ばれたりする²⁹⁾。それはさまざまな意味においてそう呼ばれるであろう。筆者もまさに、福田がさまざまな意味においてそうであることに同意を表したい。しかも、「キリスト教主義大学としての本学の父」と呼ばれるに相応しい方として心からの敬意を表したいと思われるのである。福田は、キリスト教主義大学としての本学にとっての、最初にして最上の手本ではなかろうか。

(3) 福田敬太郎における「幽玄啓明」

上述のように、(2) 福田敬太郎における信仰の特徴、についてまず検討してきた。それは、彼の唱えた「幽玄啓明」について研究・考察する場合に、先の「敬神愛人」との関係や聖書のイエスとの関係などについても視野に入れながら、福田における「幽玄啓明」に込められた重要な、さまざまな意味について、探るためであった。それらの特徴を踏まえて、その要点を挙げておきたい。

①福田敬太郎における信仰

上述のⅡ 1 (2) 福田敬太郎における信仰の特徴、について検討したところ、いくつかの特徴が目された。すなわち、①不完全な人間②「幽玄啓明」とは③信仰について④「求めよ、さらば与えられん」⑤二つの建学の精神⑥名古屋学院大学のビジョン、といった特徴が挙げられた。これらの特徴は、互いに密接に関連している。それゆえ、それらの特徴のどれかを取り出してそれだけに注目することは、浅い、狭い解釈になるおそれがある。

また、それらの特徴において、それらの根底に、あるいは、それらの頂点に信仰が息づいていると言える。その福田における信仰とは、「古き人を脱ぎ捨てて、新しき人を着なさい」「キリストを着な

さい」「キリストを共通の目標として持つ」という聖書のみ言葉を受容し、信頼し、服従し、告白して行くことであった。福田における信仰は、そうした全人格的に常に革新的・受動的・服従的な意味が含まれていると言える。

②福田敬太郎における「幽玄啓明」

上述のⅡ1(2)⑥名古屋学院大学のビジョン、でも触れたことであるが、福田は、ときどき「本大学の父」と呼ばれたりする。それはさまざまな意味においてそう呼ばれるであろう。彼の言葉をいくつか引用した中にもそのことが垣間見える。例えば、福田は、本学の創立者の一人であり、教育者、研究者、経営者、大学のビジョン、また教会人³⁰⁾(クリスチャン)としても、それぞれにおいてそう呼ばれるに値するのである。

しかし、福田が何よりも「キリスト教主義大学としての本学の父」であり、最初にして最上の手本であるということは、標語的には「幽玄啓明」として要約されることができる。すでにⅡ1.(2)②「幽玄啓明」とは、で確認したように、そこには、「学問」と「宗教」、すなわち、「大学」と「教会(キリスト教主義)」のそれぞれが真理(幽玄)の探求の明示(啓明)において結ばれているのである。それゆえに、そのどちらか一方、例えば、「学問」あるいは「大学」のみを強調すれば、それは福田の言う世俗の大学になってしまう。また、「宗教」あるいは「教会(キリスト教主義)」のみを強調すれば、それは神学大学みたいなものになる。本学は、福田が強調しているように、キリスト教主義の総合大学を目指しているのである。このことを要約している標語が「幽玄啓明」であり、これが本大学の第二の建学の精神なのである。それでは、この「幽玄啓明」と先に引き継いだ「敬神愛人」とはどういう関係になるのであるかについては、すでにⅡ1(2)⑤二つの建学の精神、でも触れたが、最後に再考察してみることにする。

③福田敬太郎における「求めよ」

上記①福田敬太郎における信仰、に基づいて、Ⅱ1(2)④「求めよ、さらば与えられん」、を福田はまた繰り返し強調するのである。その「求めよ」というのは、後述の2. イエスにおける「幽玄啓明」、において論じる予定であるが、聖書的には「祈る」こと、すなわち、「祈り求める」ことを意味している。御子イエス・キリストの父なる神からさまざまな恵みとしての良き物を祈り求めることが勧められているのである。われわれは、福田も告白しているように、不完全な人間である(Ⅱ1(2)①参照)。そのことを深く自覚すれば、祈り求めざるをえないのではなかろうか。

また、上記の②福田敬太郎における「幽玄啓明」、においてもまた「求める」ことが繰り返し奨励されている。教会は、全人格の根本なる真理が特にイエスにおいてそれ自体を示していることを求めるところである。他方大学は、文系・理系のさまざまな真理を人間の力で営々として求めているところである。教会と大学とは、そうした違いはあるが、共にそれぞれの真理を「ほんとうに求める」ところである。そうした教会と大学が共存あるいは一体となったところが、「キリスト教主義の大学というもの」である。

ちなみに、そうした福田の信仰また祈りとクラインの愛との関係についても、最後に考察すること

にする。

2. イエスにおける「幽玄啓明」

(1) 聖書におけるイエスの「幽玄啓明」

聖書におけるイエスの「幽玄啓明」について学ぶ場合、まずマタイによる福音書7：7-12が目される。そして、その平行記事としてのルカによる福音書11：9-13も挙げられる。それらはほとんど同じ内容であるが、少し違うところも見られる。そうした両者を相補的に検討していきたい。以下は、前者からの引用文である。

「求めなさい」

求めなさい (αἰτεῖτε)。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。門をたたきなさい。そうすれば、開かれる。だれでも、求める者は (ὁ αἰτῶν) 受け、探す者は見つけ、門をたたく者には開かれる。あなたがたのだけれが、パンを欲しがる自分の子供に、石を与えるだろうか。魚を欲しがるのに、蛇を与えるだろうか。このように、あなたがたは悪い者でありながらも、自分の子供には良い物を与えることを知っている。まして、あなたがたの天の父は、求める者に (τοῖς αἰτοῦσιν αὐτόν) 良い物をくださるにちがいない。だから、人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい。これこそ律法と預言者である。」(マタイ7：7-12)

(2) イエスにおける信仰の特徴

聖書における以上の一段から、イエスにおける信仰の特徴についていくつかを引き出すことができるであろう。以下の6つの特徴になる。

①あなたがたは悪い者

上掲したイエスの言葉の中に、

「あなたがたのだけれが、パンを欲しがる自分の子供に、石を与えるだろうか。魚を欲しがるのに、蛇を与えるだろうか。このように、あなたがたは悪い者でありながらも、自分の子供には良い物を与えることを知っている。」

とある。この中の「あなたがたは悪い (πονηροὶ) 者」というのは、一般社会の法律的な意味とはいくらか違う。それと無関係ではないが、さらに内面的に深い意味がある。「〈悪い〉は自己中心、不親切、物惜しみを指す (A・B ブルース、タスカー)³¹⁾」との注解があるように、「あなたがたは悪い者」は、すべての人が生来自己中心的性向を有していることを意味している。そこから神と人への軽視や無視といった罪悪が生じてくることになる。こうした「悪い者」でありながらも、自分の子供には良い物を与えることがある。

②天の父

次に注目されるのは、前掲文の中の、

「まして、あなたがたの天の父は、求める者に (τ ο ῖ ς α ἰ τ ο ῦ σ ι ν ἄ υ τ ὁ ν) 良い物をくださるにちがいない。」

である。この中の「あなたがたの天の父」は、平行記事のルカ 11:13 では「天の父」、さらに同 11:2 には「父よ」とイエスは呼びかけておられる。特に「父よ」は、当時の口語のアラム語 “אבא” (「アバ」お父ちゃん・お父さんの意) の親称に遡ると言われている³²⁾。イエスにとっての、またあなたがたにとっての主なる神は、「天地(万物)の主である父」(マタイ 11:25, ルカ 10:22) として、そうしたとても親しい、高い、偉大な、父のような方である。このような方として、「まして、あなたがたの天の父は、求める者に (τ ο ῖ ς α ἰ τ ο ῦ σ ι ν ἄ υ τ ὁ ν) 良い物をくださるにちがいない。」と、イエスは教えられた。

③御子

そのようにイエスが教えられたのは、イエスが降誕の時から神の御子であるからである。すなわち、イエスは、天また天地(万物)の偉大な主である父なる神の最愛の子として啓示して行かれた。イエスは人々に教えられるときに、よく「しかし、わたしは言うておく」(マタイ 5:22, 44他)とまづ言われた。それは、イエスがそうした神の御子として「権威ある者としてお教えになったからである。」(マタイ 7:29)。わたしたちは、イエスの教えを読む場合に、たとえそこにイエスの名前が書かれていないとしても、その教えはほかならぬ神の御子なるイエスが示されているということを、まず覚えなければならない。

④信仰

また、上掲の、イエスの言葉である、

「まして、あなたがたの天の父は、求める者に (τ ο ῖ ς α ἰ τ ο ῦ σ ι ν ἄ υ τ ὁ ν) 良い物をくださるにちがいない。」

は、イエスによる信仰の勧めである。イエスはときどき人々に「信仰の薄い者(たち)よ」(マタイ 6:30, 14:31他)と言われたが、たまに「これほどの信仰を見たことがない」(マタイ 8:10)とも言われた。そのように人々の信仰にはその度合いに違いがある。しかしそれぞれの人々に、上述のような②天の父と③御子への信仰を求められた。ただし②と③は一体であるが、詳細には③を通して②への信仰を求められた。この信仰には、応答、信頼、服従といった主に受動的な意味が含まれる。ただし、イエス御自身は天の父との、父子の、一体なる、親しい関係があったので、イエス御自身の信仰については特に言われていないようである。

⑤求めなさい

上掲のイエスの教えの中でも、キーワードとなる言葉である。この求めることが、繰り返し述べられている。前掲中のその部分に原語（ギリシア語）で明示したとおりである。例えば、初めの部分の7-8節には、

「求めなさい（ $\alpha \overset{\circ}{\iota} \tau \varepsilon \acute{\iota} \tau \varepsilon$ ）。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。
門をたたきなさい。そうすれば、開かれる。だれでも、求める者は（ $\circ \alpha \overset{\circ}{\iota} \tau \omega \nu$ ）受け、探
す者は見つけ、門をたたく者には開かれる。」

とある。これらの「求めなさい（ $\alpha \overset{\circ}{\iota} \tau \varepsilon \acute{\iota} \tau \varepsilon$ ）」「求める者は（ $\circ \alpha \overset{\circ}{\iota} \tau \omega \nu$ ）」は、上述の④信仰が前提となっている。そうした信仰が基本となって、求めることが勧められているのである。この求めることは、具体的には、祈り求めることであると言われている。なぜなら、上掲のマタイ7：7-12と平行記事のルカ11：1-13には、イエスによる祈りの模範（「主の祈り」と呼ばれる）や祈りのたとえが含まれているからである。しかも、「7節にある三つの命令法はすべて現在時制なので、それは継続的な粘り強い祈りを意味している³³⁾」ことになる。

そうすれば、

「まして、あなたがたの天の父は、求める者に（ $\tau \circ \acute{\iota} \varsigma \alpha \overset{\circ}{\iota} \tau \circ \hat{\upsilon} \sigma \iota \nu \acute{\alpha} \upsilon \tau \acute{\omicron} \nu$ ）良い
物をくださるにちがいない。」

この一節は、まさにイエスにおける「幽玄啓明」を要約していると言える。この「良い物（ $\acute{\alpha} \gamma \alpha \theta \acute{\alpha}$ ）」は、複数であり、またルカ11：13では「聖霊」と言い換えられている。それゆえ、この「良い物（ $\acute{\alpha} \gamma \alpha \theta \acute{\alpha}$ ）」は、天の父と御子と一体なる聖霊から豊かに恵まれてくるさまざまな良き物ということになる。「悪い者」で生来あるわたしたちには、そのように祈り求めることが、その都度必要なのである。したがって、まして、あなたがた（悪い者）すなわちわたしたちの天の父は、祈り求める者に真理をはじめ神のさまざまな恵みや導きを啓示してくださるにちがいないという意味になる。

⑥黄金律

最後の12節には、

「だから、人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい。これこそ律法
と預言者である。」

とあるが、ここは「黄金律」と呼ばれているイエスの教えである。この呼び方の由来は、ローマ帝国のアレクサンデル・セウェルス皇帝（A.D.208-235、第24代ローマ皇帝）が、このイエスの言葉を壁に金をもって書かせたと伝えられているからである³⁴⁾。この黄金律は、イエスの「隣人を自分のよう

に愛しなさい」(マタイ 22:39 他)に相当すると言われている。このイエスの隣人愛の教えは、イエスの「敬神愛人」に含まれている愛の教えの一部である。これらのイエスの愛の教えは、「天の父」と「御子」と「聖霊」が一体なる神への信仰に基づく祈り求めを通して恵まれ、促されてくるものと思われる。ここは、イエスにおける信仰と祈りと愛との関連が垣間見えるところである。

(3) イエスにおける「幽玄啓明」

上述のように、Ⅱ 2 (1) 聖書におけるイエスの「幽玄啓明」、として、主にマタイによる福音書 7:7-12 に基づいて、またその平行記事のルカによる福音書 11:13 を参照しながら、(2) イエスにおける信仰の特徴、について検討してきた。その要点を挙げておく。

① イエスにおける信仰の特徴

上記の検討の結果として、①あなたがたは悪い者②天の父③御子④信仰⑤求めなさい⑥黄金律、といった特徴が目立った。これらの6つの特徴は、イエスにおいては互いに密接に関連している。

その中で特に注目されるのは、まず④信仰、である。イエスは、人々に信仰を勧められた。特に②天の父と③御子への信仰を求められた。ただし②と③は一体であるが、詳細には③を通して②への信仰を求められた。この信仰には、応答、信頼、服従といった主に受動的な意味が含まれる。この信仰が、イエスとの関係の基本になる。

② イエスにおける祈り求め

上記のように、イエスとの関係の基本としての信仰に基づいて、まず祈り求めることが勧められている。それは継続的な粘り強い祈りである。「悪い者」で生来あるわたしたちには、天の父と御子と一体なる聖霊から豊かに恵まれてくるさまざまな良き物をその都度祈り求めることが必要なのである。

そして、そうしたイエスにおける「祈り求め」においてこそ、イエスにおける「幽玄啓明」が示されている。イエスにおいて「幽玄」(真理すなわち神の義)が十字架(贖いの義)まで「啓明」(啓示)され、現在も天の復活のイエスを通して聖霊によって「啓明」(啓示)されつつある。こうしたイエスにおける「幽玄啓明」は、「悪い者」で生来あるわたしたちが絶えず祈り求めることによって明示されてくるであろう。そのようにして、イエスにおける「幽玄啓明」は、わたしたちを常に全人格的に改善・改革する力となることができる。

③ 福田敬太郎とイエスにおける「幽玄啓明」

福田敬太郎における「幽玄啓明」については、Ⅱ 1. 福田敬太郎における「幽玄啓明」、において詳しく考察してきた。特にⅡ 1 (2) ②「幽玄啓明」とは、において福田の発言を通して考察した。福田において「幽玄啓明」とは、「学問」と「宗教」、すなわち、「大学」と「教会(キリスト教主義)」のそれぞれが真理(幽玄)の探求の明示(啓明)において結ばれている。前者は、文系・理系のさまざまな真理を人間の力で営々として求めている。一方後者は、全人格の根本なる真理が特にイエスにおいてそれ自体を示していることを求める。こうした「幽玄啓明」を通して、本学は、キリスト教主義の総合大学を目指しているのである。こうした「幽玄啓明」が、本大学の第二の建学の精神として

提唱された。

イエスにおける「幽玄啓明」は、上述の福田における「幽玄啓明」の中の、「宗教」、すなわち、「教会（キリスト教主義）」に関わる。これらは、真理（幽玄）の啓示の探求（啓明）に携わるのであるが、全人格の根本なる真理が特にイエスにおいてそれ自体を示していることを求める。そのことによって、キリスト教主義による、全人格の陶冶を使命とするのである³⁵⁾。

それゆえに、クラインとイエスは、愛を使命としたが、他方福田敬太郎とイエスは、信仰に基づく祈り・求めを使命としたと言えるであろう。

III まとめ

上述のように、『敬神愛人』と『幽玄啓明』—名古屋学院大学の二つの基本的精神—のテーマをめぐって、I EC.クラインとイエスにおける「敬神愛人」、について、そしてII 福田敬太郎とイエスにおける「幽玄啓明」、について、検討・考察してきた。その際、できるかぎり、それぞれの原文を参照した。それらの検討・考察を踏まえて、最後に要点を以下の5つ挙げておきたい。

1. クラインの「敬神愛人」と福田敬太郎の「幽玄啓明」は、究極的には主イエス・キリストに基づく。

まず、「敬神愛人」と「幽玄啓明」は、名古屋学院大学の二つの基本的精神であると言えることができる。このことは、「本大学の父」と呼ばれる福田自身も明言している（II 1(2)②⑤の引用文参照）。本学は、基本的精神が「二刀流」の大学なのである。

また、「敬神愛人」がクラインによって掲げられ、「幽玄啓明」も福田敬太郎によって唱えられたのも、そのとおりである。これらの二つの基本的精神は、二人のそれぞれのミッション・使命の受領と共に解釈されなければならない。それならば、「敬神愛人」＝クライン、また「幽玄啓明」＝福田敬太郎、と言い切ってよいのだろうか。もしそうするのならば、これらの二つの基本的精神がキリスト教主義のものであるという保証は不安定になるであろう。そうなれば、二人は祭り上げられるおそれが増えて行くことになる。クラインにしても福田にしても、まず何よりも聖書特にその中心・土台である神の御子・救い主イエス・キリストに学ぶという姿勢が明確にあった。彼らは、聖書を何よりも正典として重視するキリスト教プロテスタントの信仰者であった。それゆえに、クラインの「敬神愛人」も福田敬太郎の「幽玄啓明」も、彼らにおいてもまた信仰的に言っても、究極的にはそうした主イエス・キリストに基づく。さらに、これらの二つの基本的精神は、聖書のイエス・キリストに照らして絶えず再解釈されて行くことによって、ますますキリスト教主義すなわちキリスト教プロテスタント（Protestant）として、聖化、改善、改革³⁶⁾されて行かなければならないのである。本論文では、このこともまた試みたのであるが、クラインとイエス、福田とイエス、の対応関係が、驚くほどほぼ共通していることが判明した。

2. 「敬神愛人」と「幽玄啓明」は、宗教的に、相補的である。

I 1 (3) クラインにおける「敬神愛人」、また I 2 (3) イエスにおける「敬神愛人」、において述

べたことであるが、両者におけるさまざまな愛の特徴は、密接な関連があると同時に共通な性質がある。すなわち、それらの愛は、原語のギリシア語で言えば、「アガペー（ἀγαπᾶν）の愛」として要約される。このイエスに基づく「アガペー（ἀγαπᾶν）の愛」は、イエスを模範・目標とするところの他者中心的・他者奉仕的・他者贈与的な愛と言われている。

他方、Ⅱ1(3) 福田敬太郎における「幽玄啓明」、またⅡ2(3) イエスにおける「幽玄啓明」、において述べたように、彼らにおいて、「幽玄啓明」とは、「学問」と「宗教」、すなわち、「大学」と「教会（キリスト教主義）」のそれぞれが真理（幽玄）の探求の明示（啓明）において結ばれている。前者は、文系・理系のさまざまな真理を人間の力で営々として求めている。一方後者は、全人格の根本なる真理が特にイエスにおいてそれ自体を示していることを求める。

すなわち、クラインとイエスは、そうした他者贈与的な愛を使命としたが、他方福田敬太郎とイエスは、信仰に基づく祈り・求めを使命としたのである。こうした宗教的な関係において、「敬神愛人」と「幽玄啓明」とは、相補的なのである。

3. 「敬神愛人」と「幽玄啓明」は、実践的に、相補的である。

Ⅱ1(2) ⑤二つの建学の精神、で述べたことであるが、Ⅰ FC.クラインとイエスにおける「敬神愛人」、においても論じたように、そもそも「敬神愛人」は、われわれ人間から生まれるものではない。それは、神から、特に御子イエス・キリストを通して啓示されて来た愛なのである。

わたしたち人間から生まれるのは、自己中心的・自己所有的な愛であり、「エロース（ἐρως）の愛」として知られている。この「エロースの愛」から「アガペーの愛」（2. 参照）へと導かれるためには、神の御子の導きを絶えず求めることが必要なのである。これが、「幽玄啓明」に含まれる信仰による祈り求めを常に必要とするわけである。

福田は、「しかし、その『敬神愛人』という言葉で表わされておりますキリスト教精神が、ほんとうに現在我々の内に生きているかという事が問題であり反省しなければならないことと思います」という問題また反省を促しているのである。

4. 「敬神愛人」と「幽玄啓明」は、本学の基本的精神として、相補的である。

また、Ⅱ1(2) ⑤二つの建学の精神、で述べたことであるが、福田は「神を敬い、人を愛するというこの標語が、我々の名古屋学院大学の永遠の目標である」と宣言しており、その理由として「すべての人に共通の目標としてこれを示しているのであります」と述べている。この「敬神愛人」はまさに「我々の名古屋学院大学の永遠の目標である」のみならず「すべての人に共通の目標」なのである。それは、このように永遠なる、大いなる課題なのである。

さらに、彼は「しかし私は、そうした言わば伝統的な言習わしになっております建学の精神というものでは満足しないで、8年前にここに名古屋学院大学が建てられた、その大学の者として大学の建学の精神とは何かを考える必要があると思います」とも要望している。これまでの名古屋学院中・高校の建学の精神「敬神愛人」だけではなく、大学の建学の精神が必要であるということである。しかも、キリスト教主義の総合大学のための建学の精神なのである。これが、「幽玄啓明」なのである。

これもまた、まずキリストに基づくものである。

5. 「敬神愛人」と「幽玄啓明」についての研究が、今後ますます重要である。

両者についての研究状況については、Ⅰ 1 (1) またⅡ 1 (1) で述べておいたとおりである。まず、資料についてであるが、「敬神愛人」を掲げたクラインが関わった多くの資料は、現在のところ本学の周辺また日本国内には見当たらない。それらの多くは、例えば、本人が書いた報告書や会報や書簡などは、現在アメリカの教会関係の図書館や資料館に保管されているとみられる。また、「幽玄啓明」を唱えた福田敬太郎の資料については、福田ゆかりの方々から、思いがけず、福田ゆかりの日記やノートをたくさんお借りすることになった。それは、『福田敬太郎日記・ノート（全29巻）』として仮製本化をしたが、しかしその中の『福田敬太郎日記No.30（Ⅱ/3）幽玄1965.6.1～1966.5.25』と『福田敬太郎ノート（Ⅱ/12）敬愛1964.4.15～1978.6.29』の2巻が完全製本化・デジタル化されたところである。そのように、両者に関する資料はまだ多く眠っているような状況なのである。

最後に、上記のように、「敬神愛人」と「幽玄啓明」についての研究が、今後ますます重要である、さらなる理由を述べておきたい。それは、そのような両者に関する資料が蒐集・研究されることによって、二人がそれぞれの建学の精神を高唱したその真意やそれぞれの実像がより明らかになることが期待される。

しかし、筆者は、それだけではなお不十分であるように思われる。二人が何よりも願っていたのは、キリスト教主義の高揚また浸透であったのではないかと思われる。もちろんそれは、キリスト教主義の学校やキリスト教主義の総合大学ではあるのであるが、二人は「旗幟を鮮明にし、所信を勇敢に表白すること³⁷⁾」を何よりも重んじていたように思われるのである。

注

- 1) 「学校法人名古屋学院大学寄附行為」（目的）第3条、「名古屋学院大学学則」（目的）第1条、「名古屋学院大学大学院学則」（目的）第1条、を参照。
- 2) ニューヨークの合同宣教図書館、ワシントンD.C. のウェスレー神学校資料館には未出版の書簡・原稿がある。特に、後者にはクライン直筆の日記と書簡、1883-87年の経理報告と領収書を含む公務書状の写しの綴じ込み、1850-1908年の宣教局の手書きの日記が、保管されている。さらに、ノースカロライナ州ジュナラスカ湖畔の合同メソジスト教会資料館には、クライン書類ファイルNo.36にクラインの財務記録一切と、日本宣教の最初の4年間における宣教局との通信が保管されているということである。John Krummel, *The Methodist Protestant Church in Japan* (Kyoudan Yokohama honmoku Church, 2006). (『ジャン・克蘭メル論集—メソジスト・プロテスタントチャーチ・イン・ジャパン』日本基督教団横浜本牧教会, 2006年, 6, 61, 76頁)。
- 3) F.C.Klein, *The Sermon by Rev.F.C. Klein for the Week of Prayer in Yokohama, 1884*. (F.C.クライン「1884年初週祈禱会におけるF.C.クラインの説教」黒柳・高見・増田・共訳『名古屋学院大学論集・人文・自然科学篇55巻2号』(本号)に所収, 2. リヴァイバル影響下での1884年初週祈禱会)。Otis Cary, *A History of Christianity in Japan, vol.2, Protestant Missions*, F.H.Revell, 1909. (O.ケリー『日本プロテスタント宣教史—最初の50年(1859-1909年)』江尻弘訳, 教文館, 2010年, 第六章「急速な成長を遂げた時代」(1883-1888年))。

- 4) 聖書の以下の引用は、『聖書一新共同訳』（日本聖書協会）に拠った。
- 5) 「発見されたクラインの説教」の引用文の邦訳は、筆者の私訳である。できるだけ原文に即して訳した。3) の共訳も参照した。
- 6) 使徒パウロのこの標題の言葉は、新約聖書のテサロニケの信徒への手紙一3:12-13にある。
- 7) ヨハネによる福音書6:38-40, テサロニケの信徒への手紙一4:13-18, フィリピの信徒への手紙3:10-21, 他参照。
- 8) 聖書によると、パウロは、日本と似た異教的情况にあったリストラやアテネでも説教や宣教を行った。その記事は、日本での説教や宣教を行う場合の貴重な参考になる。使徒言行録14:8-20, 17:16-34, 参照。
- 9) その一考として、拙著『源信とパウロ―「往生要集」と「書簡」における神秘主義の比較―』（春風社, 2007年）を参照されたい。
- 10) 例えば, A. ニーグレン『アガペーとエロース―基督教の愛の観念の研究―I』岸千年・大内弘助訳（新教出版社, 昭和29年）を参照。
- 11) 同著を参照。
- 12) 上記4) に同じ。引用ギリシア語は、cf. *Greek AND English Interlinear New Testament*, ZONDERVAN, 2008.
- 13) イエスにおける愛の特徴については、詳しくは、拙著『聖書における愛―イエスの愛とパウロの愛―』（春風社, 2011年）を参照されたい。
- 14) 例えば、エレミアス『新約聖書の中心的使信』川村輝典訳（新教出版社）116-141頁, 他参照。
- 15) 「イスラエルの父」（マルコ12:29, ヨハネ1:11, 他）「天の父」（マタイ5:45, 6:9, 他）「天地の主である父」（マタイ11:25, ルカ10:21, 他）「アッパ」（マルコ14:36, ガラテヤ4:6, 他）。
- 16) このイエスによる敬神愛人を強調したのが吉岡美国である。例えば、井上琢智「吉岡美国と敬神愛人（6）」『関西学院史紀要』第11号を参照。
- 17) 詳しくは、上掲13) を参照されたい。
- 18) 『麦粒』は、名古屋学院大学宗教委員会さらにキリスト教センター発行の冊子で、チャペルの奨励の選集である。福田の時代から始まり、現在まで発行されている。表紙の「麦粒」の筆跡は、福田のものである。
- 19) 『名古屋学院大学五十年史』（学校法人名古屋学院大学, 二〇一四年）, 99頁以下。『幽玄啓明』（学校法人名古屋学院大学, 昭和五十五年）, 35頁, などを参照。
- 20) 「名古屋学院時報」（昭和41年7月20日）『福田敬太郎ノート（Ⅱ/12）敬愛1964.4.15～1978.6.29』（福田敬太郎研究会, 2017年）に所収。
- 21) 「学問と宗教―大学におけるキリスト教教育の基本理念―」『麦粒―福田敬太郎先生追悼号―』第33号（1980年7月25日, 名古屋学院大学宗教委員会）。
- 22) 「我々にとって建学の精神とは何か」『麦粒』第7号（1972年3月10日, 名古屋学院大学宗教委員会）。
- 23) 「新しい人を着よ」『麦粒』第18号（1974年5月1日, 名古屋学院大学宗教委員会）。
- 24) 上掲の22) を参照。
- 25) 福田敬太郎「第二回入学式式辞」（昭和四十年四月十二日）『幽玄啓明』（学校法人名古屋学院大学, 昭和五十五年二月九日）。
- 26) 上掲の22) を参照。
- 27) 福田敬太郎「第3回開学式式辞草稿」（1966・10・15）『福田敬太郎ノート（Ⅱ/12）敬愛1964.4.15～1978.6.29』（福田敬太郎研究会, 2017年）に所収。
- 28) 福田敬太郎「わが大学を語る―一旗幟を鮮明に― 所信を勇敢に―」『蛍雪時代』（1966・12）は、『福田敬太郎ノート（Ⅱ/12）敬愛1964.4.15～1978.6.29』（福田敬太郎研究会, 2017年）に所収。
- 29) 『名古屋学院大学三十年史』（学校法人名古屋学院大学, 平成六年）, 185頁。『名古屋学院大学五十年史』（学校法人名古屋学院大学, 二〇一四年）, 131頁。

- 30) 福田は、その母教会の日本キリスト改革派神港教会で長年長老に選ばれ、また同教派の大会議長にも選ばれた。長老が大会議長に選ばれたのは、福田一人だけである。
- 31) 増田啓雄「マタイの福音書」『新聖書注解 新約1』（いのちのことば社，1985年），105頁。
- 32) R. ボウカム『イエス入門』山口希生・横田法路訳（新教出版社，2013年），113頁。上掲11）も参照。
- 33) R.T. フランス『マタイの福音書—ティンデル聖書注解—』山口昇訳（いのちのことば社，2011年），185頁。
- 34) E. シュヴァイツァー『マタイによる福音書—NTD新約聖書注解—』佐竹明訳（ATD・NTD聖書注解刊行会，1986年），230-231頁。
- 35) 上掲1）を参照。
- 36) 福田は、しばしば特にプロテスタントの大学や教会が常に改革されなくてはならないことを述べている。例えば、21）24）などを参照。
- 37) 上掲28）を参照。